

大学史研究通信

第41号、2004年10月31日(日)

大学史研究会

第41号の内容：第27回大学史研究セミナーのお知らせ・会員ニュース・会員新刊ニュース・研究紹介・編集後記・大学史研究会事務局員一覧

第27回大学史研究セミナーのお知らせ

第27回大学史研究セミナーの開催について

2004年度大学史研究セミナー(第27回大会)を2004年11月27日(土)、28日(日)の両日に帝京大学八王子キャンパスにて開催いたします。セミナーの詳細については、同封の別紙プログラムをご覧ください。

セミナーに関する連絡・問い合わせ先：

事務局セミナー担当 福石 賢一

〒807-8586 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 九州女子大学文学部

Tel./Fax.: 093-693-3335

E-mail: fukuishi@kwuc.ac.jp

会員ニュース

阿曾沼 明裕 会員(住所変更)

住所：

TEL/FAX：

田中 正弘 会員(所属変更)

所属： 日本女子大学 人間社会学部教育学科 客員研究員

会員新刊ニュース

潮木守一『世界の大学危機 -新しい大学像を求めて』中公新書、2004年

「会員新刊ニュース」情報提供のお願い

この欄では、会員の研究活動の紹介を心がけておりますが、編集者の情報のみでは限界があります。新刊を発行されたご本人、あるいは会員が新刊を発行されたという情報を得られた方は、編集担当杉谷までご一報頂ければ幸いです。

研究紹介

ハイデルベルク大学の3人の初期日本人留学生

荒木康彦（近畿大学）

ハイデルベルク大学の3人の初期日本人留学生を実証的に取り上げ、初期のドイツ留学の在り方について報告したい。その3人とはハイデルベルク大学の「学籍簿」に登録した日本人学生の中で年代的に最も早い3人、即ち1868年10月21日に学籍登録している Sédzi Masima、1870年5月5日に学籍登録している AkahoBi Kenzau、1873年10月23日に学籍登録している Masao Tokusige である。この中の AkahoBi 即ち赤星研造(1844-1904)は、従来ドイツの大学に留学した最初の日本人学生であるとされてきたが、私の研究の結果、Masima 即ち馬島(後に改姓して、小松)済治(1848-93)は、ドイツの大学に留学した最初の日本人学生であることが明らかになった。また、Tokusige 即ち徳重正雄(1846-87)は初期留学生としてはかなり豊富な一次史料を残していて、甚だ興味深い。

先ず、「留学」なる語そのもの文献学的考察をすると、以下の通りである。『続日本紀』巻十二の「聖武天皇 天平七年」(735年)四月の件に「留学生」という語が見出し得るのであり、これが留学という語の初出であろう。更に、同じく『続日本紀』巻三十三の「光仁天皇 宝亀六年」(775年)十月の件に「留学」という語の形で見出せる。だが、近世に入って、鎖国体制が確立する中で、海外留学という意味での「留学」という語は当然使われなくなった。慶応二(1866)年四月に海外渡航が認められるが、「留学」という語の使用はまだ一般的ではなかった。そして、漸く明治二年頃の海外渡航に関する公文書に「留学」という語が現れ始め、そうしたことを踏まえて、明治三年十二月廿三日の「布告」においても「海外留学規則」として「留学」という語が使われており、公文書において海外留学という意味での「留学」という語が定着したことを反映したものとと言えるであろう。

この報告で取上げる幕末・維新时期は、「ポスト・クリミア戦争」の時代であり、それまでに英露両超大国間にあった、ヨーロッパ国際社会の現状維持のコンセンサスがなくなり、国際社会が極めて流動的になった。かかる国際的環境のもとでプロイセンによる

ドイツ統一が推進され、また明治維新も歴史的現実になりえた。それ故、この時期の日本人のドイツ留学は近代国民国家形成途上の日本から、同じくその途上にあつたドイツに渡つたということの意味し、その点が他の国への留学とは異なるのである。

上記の3人の留学の在り方を実証的に検討するため、次の5点の枠組みを設定する。

(I) 3人の出自 (II) 留学の為の国内における「前線基地」(III) 留学の形、換言すれば費用の出所 (IV) 留学の為の離日の正確な時期及びドイツ留学への経路、(V) 留学の法的根拠。

赤星の留学についての従来の研究の問題点は、一次史料、殊にドイツ側のそれに基づいていないことである。根本史料とも言うべきハイデルベルク大学の「学籍登録簿」(Matrikel)の該当部分、即ち Die Matrikel der Ruprecht-Carls-Universität in Heidelberg. Sommersemester 1870.を精査した結果、同年5月5日に Akahoši Kenzau が学籍登録し、出身地を Tikusen Japan、保護者の身分と素性を Officir、宗教を Sindo、研究を Medicin としているのを見出した。毎年出版された同大学の「住所録」(Adreßbuch)を通年的に閲読した結果、赤星の名前は 1870 年夏学期のものから 1873 年夏学期のものまでに認められるので、彼は 1870 年夏学期から 1873 年夏学期まで同大学に在籍したことが分る。先に挙げた枠組みで、赤星の留学について見ると、以下のようになる。(I) については、私が見出した一次史料、「覚(松平美濃守内栗田貢より長崎運上所宛て御印章下渡願 慶応三年二月)」によれば、「松平美濃守家来 医師 赤星研造 卯二十四歳」とされていることから、赤星家は士分に属していたと推測される。

(II) については、赤星が明治八年に東京府に提出した「私学開業願」やその他の関連史料から、赤星が長崎の医学校「精得館」で学んだと推測される。(III) については、福岡藩側から長崎の運上所に提出された公文書たる、上に挙げた御印章下渡の「覚」から、更に明治六(1872)年二月廿八日に文部省から正院宛てに出された「赤星研造帰朝ノ儀ニ付伺」に、「福岡縣貫属赤星研造儀(中略)ハ従前元福岡藩費ヲ以修行致居候者(後略)」とあることから、赤星の留学は福岡藩による派遣であったと言えよう。(IV) については、この当時、横浜で刊行されていた英字新聞 The Daily Japan Herald.

Vol.2.No.1,119. THURSDAY, 13th JUNE, 1867.に掲載されている「横浜船舶情報」の中の「船客」の欄及び船舶の「出発」の欄から、1867 年 6 月 13 日に赤星は緒方・松本・武谷とともに医師 A.F.ボーウァンに連れられて、出国したことが判明した。そして、オランダ側の史料から赤星は 1867 年から 1869・1870 年の交までの間はオランダに留学していたが、その直後頃にハイデルベルク留学に転じたということも判明した。(V) については、慶応二年四月の「学科修行又は商業」のための海外渡航許可の公布に従って、福岡藩が下渡を願ひ出た「御印章」、つまりは旅券によって赤星は留学のため渡航出来たということになる。

ハイデルベルク大学の「学籍登録簿」を精査してみると、赤星以前に既に Sêdzi Masima なる日本人学生が 1868 年 10 月 21 日に学籍登録し、出生地は Yeddo(Japan)、

保護者の身分と素性は Arzt (医師)、宗教は Cofusius (儒教)、研究は Medicin (医学) と記しており、彼こそがドイツの大学に正式に留学した最初の日本人学生である。彼は同大学の 1868-69 年の冬学期及び 1869 年の夏学期の「住所録」のみに現れ、したがって彼はこの両学期のみ在籍したといえよう。この Sédzi Masima は如何なる人物かは全く不明であったが、私が採取した日独の一次史料 (明治維新直後に紀伊和歌山藩に軍事教官として採用されたドイツ人カール・ケッペン [Carl Köppen 1833-1907] の「回想録」及び彼の日本滞在中の「日記」、「明治十八年 公文録 官吏進退 司法省」収録の小松済治の履歴書、1873 年のウィーン万国博覧会の際に同地で発行された独文新聞 Allgemeine Illustrirte Weltausstellung-Zeitung, Band II, Nummer 14. に掲載された T. Comatz のプロフィールを報じた記事、東京都谷中霊園の「従五位勲五等小松済治君之墓」に刻まれた 800 余文字から成る漢文の碑文) に対して徹底した史料批判をなし、この人物が小松済治であることを実証出来た。(I) の出自については、彼の墓の碑文と「会津藩馬島瑞謙先生之墓」にある碑文から、馬島済治は会津藩々医の馬島瑞謙の長男であったことが分る。(II) の点であるが、彼の墓の碑文及び上記の独文新聞の記事から慶応元 (1865) 年から渡欧するまで、彼は長崎の医学校で学んでいたことが分る。慶応元年長崎で撮影された写真「精得館受業生」(写された 13 人の学生全員の名前も分っている) の中に馬島済治がいるのを確認することが出来た。そして会津藩の一次史料から、彼は藩費で長崎の精得館に派遣されたことも判明した。(III) については、かれの墓の碑文に出て来る「獨乙人靈満」、即ちカール・レーマン (Carl Lehmann 1831-74) の 1867 年 5 月 11 日付けの山本覚馬宛て蘭文書簡及び明治期のレーマン関係の一次史料から、馬島の場合、藩費留学であったが、不足分はレーマンから融資を受けていたことを実証出来た。(IV) については、上に挙げたレーマン書簡から、馬島はレーマンと一緒に 1867 年 5 月 15 日に長崎を発ったことが分る。オランダ在住の緒方惟準から長崎の池田謙斎宛の 1868 年 3 月 8 日付け書簡によれば、ハイデルベルクに赴くまではレーマンの出身地のオルデンプルクに馬島はいたことが分る。(V) の留学の法的根拠は、馬島の場合も、赤星同様に慶応二年四月の「学科修行又は商業」のための海外渡航許可であることはいうまでもないが、馬島への御印章下渡しについての史料が発見出来ないで、彼の海外渡航の申請理由が如何なることになっていたかは、現在のところ不明である。

Masao Tokusige は 1873 年 10 月 29 日にハイデルベルク大学に学籍登録しており、出生地は Tokusige aus Japan、保護者の身分と素性は Bauer (農民)、宗教は japanisch、研究は Cameralia (官房学) と記している。同大学の「住所録」から判断すれば、Masao Tokusige は 1873-74 年冬学期から 1874-75 年の冬学期の 3 学期のみ同大学に在籍したということになる。彼が記している出生地 Tokusige が筑前国宗像郡徳重村ではないかと考え、宗像郡 (今日の宗像市) の郷土史文献を調べた結果、明治前期に同郡出身の県会議員に徳重正雄なる人物がいることが判明した。更に、ハイデルベルク大学留学中

の書簡およびその写しを中心とした徳重正雄関係の史料を見出すことが出来た。(I) については、宗像市にある石松家の墓所の「石松家代々之銘碑」に「県会議員徳重正雄 伴六長男 四十二才 明治二十年三月二十一日」とあり、「十代大庄屋同伴六重巽 六十才 明治九年四月十六日」とあることから、徳重正雄は筑前国宗像郡大庄屋石松伴六の長男であることが分る。また、彼は「外務省記録 自丁卯年至壬申年申」に収録されている「航海人明細録」の「獨」の件に「徳重泰次郎」として出て来るが、渡航理由は「留学」、身分は「福岡縣農民」となっており、ハイデルベルク大学の「学籍登録簿」に Bauer と記されているのに符合する。(II) については、翻刻史料で、しかもその来歴が明らかではない「履歴書 宗像郡徳重村 徳重正雄」では「明治四未年七月ヨリ外国語学校ニ入門、獨逸語学ヲ修行ス。」なっており、この「外国語学校」は「大学南校獨逸學傳習所」とも考えられるが、今後尚考究する必要がある。(III) 上記の「航海人明細録」の徳重の欄には「私」、つまり「私費」とあることから、徳重の留学が私費留学であったことは明白である。(IV) については、徳重の書簡等によれば、彼は明治五(1872)年三月に出国し、彼は先ずロンドンに向かい、そこで一月程滞留して見物した後に、ドイツに真っ直ぐ向かっている。「航海人明細録」には彼の名前が「獨」の件にあることから、彼は最初からドイツ留学を志向していたといえよう。(V) 徳重は明治五年三月十九日に外務省から海外旅行免状、即ち旅券を交付されているから、彼の場合はいうまでもなく明治三年十二月廿三日の「海外留学規則」に基づくものである。

付記： 本稿は、昨年度の第 26 回研究セミナーのシンポジウム「留学の大学史 一人の移動と知のトランスファー」の「報告 2 日本からドイツへ」の要約文である。

原稿募集

『大学史研究通信』第 42 号は 2004 年 12 月 31 日に発行予定です。会員諸氏の現在の研究紹介、文献案内、会員主催の行事のお知らせなど、どのようなものでも結構です。皆様からの投稿を心よりお待ちしております。原稿提出・お問い合わせ等は『通信』編集担当の杉谷までお願いいたします。

住所・所属変更届のお願い

住所や所属(昇任・学位取得も含む)に変更のある会員は事務局進藤までご一報くださるようお願いいたします。教授・研究のために海外にご滞在予定のかたも、海外での連絡先をお教えいただけましたら幸いです。ご連絡は最終ページにございます、進藤研究室宛にお願いいたします。

『大学史研究通信』バックナンバー希望者に頒布いたします

『大学史研究通信』第14号～現在発行号まで希望者に頒布いたします。80円×部数＋郵送料（1部の場合90円、2部以上は120円）分の切手を同封の上、編集担当杉谷宛までご請求ください。ご連絡は最終ページをご覧ください。

編集後記

いよいよ、本年度開催の研究セミナーが近づいてまいりました。今回、荒木先生の御論稿を掲載させていただきましたが、早いもので昨年度の研究セミナーから一年が経とうとしております。昨年度ご参加くださいましたみなさまには、今回の『通信』を通じて、セミナーでの活発な議論の様子などをより鮮明に思い出していただけたのではないのでしょうか。今年も一人でも多くの方々のセミナーへのご参加をお待ち申し上げております。みなさま、お力添えのほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

（杉谷祐美子記）

『通信』編集は事務局・杉谷祐美子が担当しております。

連絡先（E-MAIL） sugitani@cl.aoyama.ac.jp

なお、E-MAIL以外による御連絡は、下記までお願いいたします。

連絡先 〒562-8558 大阪外国語大学外国語学部 進藤 修一研究室内

TEL/FAX 072-730-5355

E-MAIL sshindo@post01.osaka-gaidai.ac.jp

sshindo@jnb.odn.ne.jp

『大学史研究通信』第42号は、2004年12月31日発行予定です。

大学史研究会事務局

〒562-8558 大阪府箕面市粟生間谷東8-1-1

大阪外国語大学外国語学部 進藤 修一研究室内 大学史研究会

TEL/FAX 0727-30-5355 EMAIL sshindo@post01.osaka-gaidai.ac.jp

大学史研究会事務局員（五十音順）

大川 一毅（秋田大学）

杉谷 祐美子（青山学院大学）

吉野 剛弘（鹿児島女子短期大学）

進藤 修一（大阪外国語大学）

福石 賢一（九州女子大学）

吉村 日出東（明治大学）